



Title	エドワード・ヤン映画研究：映画の画面における運動の視点から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	趙, 陽
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13282号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/72204">http://hdl.handle.net/2115/72204</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yang_Zhao_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 趙 陽

主査 教授 応 雄  
審査委員 副査 准教授 阿部 嘉昭  
副査 准教授 浅沼 敬子

## 学位論文題名

エドワード・ヤン映画研究

—映画の画面における運動の視点から—

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

台湾ニューシネマの旗手のひとりとして、その優れた芸術的感性が世界的に認められるエドワード・ヤンは、かねてから批評家や研究者の関心を惹きつける映画作家である。これまで、評論、雑誌特集、エッセイ風の書物など、同映画作家に関する批評・研究がなされてきたが、まとまったアカデミックな論考は不在のままであった。本論文はまずそうした性格をもつ論考をはじめて試みるものであると認められる。次に、1980-90年代における台湾の社会的・政治的状況との関わり、あるいはポストモダンとよばれる現代社会の状況といった視点からエドワード・ヤンの作品を解釈する一部の先行研究と差異化を図るべく、本論文は映画の画面に焦点を当て、そこにみられる表現上の特徴的な点を吟味するというアプローチをとり、細部にわたる美学的考察を可能にした。また、論文申請者が分析に力点を置いた『恐怖分子』、『牯嶺街少年殺人事件』、『ヤンヤン 夏の思い出』に関する論考、およびこれまでほとんど本格的に研究されることの無かった『追風』についての考察では、カメラ運動がもたらす「ブレイキング・ザ・フォー」の効果、写真イメージの挿入が有する物語世界への攪乱および「外」の「闖入」といった働き、フィックスショット内における画面外を指向する要素の動的提示、異質なもの同士を意図的に混在させることによって得られる収束と分岐の弁証法的効果といったエドワード・ヤンの映画表現における特徴的な点を明らかにした。エドワード・ヤンに関する研究の領域において、画面上の細部に照準を定めそれを懸命に記述しようとするとともに、理論的視点から解読しようとする本論文のアプローチおよびその努力に、一定の成果が認められよう。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は上述の諸点において論文の達した一定の成果を評価する。いっぽう、審査委員会は論文に残る問題点についても具体的に指摘した。現代思想や現代映画理論などの諸思考を援用しつつ、エドワード・ヤン映画論に理論的深みを与えようとすることは申請者の学術的意欲を窺わせるものだが、理論を適用するに際し、よりいっそうの慎重さと厳密性が求められる。たとえば、エドワード・ヤンの作品をめぐる考察を展開させる過程でジョナサン・クレリーの概念装置が十分に有効かつ生産的なものになっているか、判然としないものも若干残る。また、ヤン作品を考察するにあたって、作品によって分析の緻密さにばらつきが見られるが、このことは論文の主要なる問題関心からして重要度の違いから生じたものと思われるが、各作品論のあいだのバランスへの配慮がやや欠ける感を否めない。さらには、画面を具体的に分析する一部の箇所説得力が不十分な記述や、論文の主要観点を強調するあまり検討すべきと思われる個別な事象が捨象されているのではないかといった指摘もあり、より綿密かつ周到に場面を読解するのが望ましかった。

審査委員会はこれらの問題点が、主に、本論文の取り組む研究課題の新規性と、申請者が同研究対象に関する新しい論考を意欲的に構築しようとする姿勢とに伴う瑕疵であったことを、口頭試問をへて確認し、申請者がこれから本課題の研究をさらに推し進め、深めていく過程でより高度なものに改善できるものであると考えた。以上の審査経過および審査状況に基づき、本審査委員会は全員一致で趙陽氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。